

215 ^{99m}Tc -PYP 心筋シンチ上で右室梗塞の合併を思わせた下壁梗塞例の検討

吉田 宏、安田鋭介、松尾定雄、金森勇雄、中野哲（大垣市民病院、特放） 柴田哲男、佐々寛己（同、一内）

今回我々は、 ^{99m}Tc -PYP 心筋シンチにて右室梗塞の合併を思わせた下壁梗塞例について、通常の下壁梗塞と比較検討したので報告する。対象は、ECGにて急性下壁梗塞所見を示し、本法を発症後8日以内に施行した38例である。〔結果及び結語〕(1)急性下壁梗塞38例中右室梗塞合併例（RV(+)群）14例（36.8%）非合併例（RV(-)群）24例（63.2%）であった。(2)血清酵素（P-CPK, P-LDH₁）はRV(+)群がRV(-)群に比し有意に高値を示し（ $P < 0.01$ ）、P-CPKは全例が1000IU以上、P-LDH₁は600U以上であった。(3)TL心筋シンチより算出したTLscoreにおいて両者間に有意差は認められなかった。(4)冠動脈造影所見では、RV(+)群がRV(-)群に比し、右冠動脈のより近位部での狭窄が認められた。(5)RV(+)群において、右室梗塞の強い集積を見た描出度(卍)の症例は14例中5例（35.7%）あり、全例が本法を発症後72hr以内に施行した梗塞心筋量の多い症例（P-CPK>1400IU）であった。本法にて右室梗塞の合併をより正確に検出するには、発症後比較的早期に施行する必要があると思われる。

216 Coenzyme Q₁₀とPerfluorochemical Blood（人工血液）が心筋梗塞範囲に与える影響に関する実験的研究

池部伸彦、内藤雄一、渡辺 健、赤羽伸夫、小林泰彦、阿部俊也、永井義一、山沢増宏、伊吹山千晴（東京医大・2内）、村山弘泰（同大、放）、蜂谷哲也、佐々 弘（同大、2病理）

〈目的〉本実験ではCoenzyme Q₁₀（CoQ₁₀）とPerfluorochemical Blood（PFC）が心筋梗塞範囲の拡大阻止にいかなる効果を有するかを、病理組織所見とも併せて検討した。

〈対象並びに方法〉33頭の雑種成犬を用い、慢性心筋梗塞犬を作成し、PFCとCoQ₁₀を投与した。梗塞範囲は摘出心の ^{99m}Tc -PYP心筋シンチグラムより算出した。〈成績並びに結語〉心筋梗塞範囲は結紮のみの群に比し、結紮後にCoQ₁₀を投与した群と、PFC並びにCoQ₁₀を併用投与した群で、統計学上有意に、その大きさは縮小していた。共に（ $P < 0.05$ ）。一方、病理組織学的には、薬剤投与両群では、心筋の変性・壊死・出血の程度はかなり軽度で、肉芽組織の形成も良好であり、その範囲は限局性島状である。また、結紮のみの群では心筋細胞の強い変性・壊死を示す像が残存しており、心筋束間は幅広く粗鬆で浮腫性となり、また、多核白血球を主とする細胞浸潤や広範囲の出血像がみられた。

217 Perfluorochemical Blood（人工血液）とL-carnitine が心筋梗塞範囲に与える影響

渡辺 健、内藤雄一、池部伸彦、赤羽伸夫、小林泰彦、阿部俊也、永井義一、山沢増宏、伊吹山千晴（東京医大、2内）、村山弘泰（同大、放）、蜂谷哲也、佐々弘（同大、2病理）

〈目的〉本研究では、Perfluorochemical Blood（以下PFCと略す）及びL-carnitine（以下LCと略す）が心筋梗塞範囲に与える影響を調べるについて検討した。〈対象並びに方法〉8～12kgの雑種成犬33頭を使用し、心筋梗塞は左冠動脈を結紮し作成した。内訳は、冠動脈を結紮したのみの群（結紮群）、結紮後に7日間LCを連続投与した群（LC群）、結紮後にPFCのみを3日間投与した群（PFC群）、そしてPFCとLCを併用投与した群（併用群）である。梗塞範囲は摘出心の ^{99m}Tc -PYP心筋シンチグラムにより測定した。また病理組織学的にも検討した。

〈成績並びに結語〉梗塞範囲は結紮群に比較するとPFC群で統計学上有意に縮小していた。他のLC群、併用群では有意ではないが結紮群に比して縮小傾向がみられた。病理組織学的には、梗塞病巣の状態は略々梗塞範囲に準じた所見が得られた。

218 運動負荷心プールスキヤンによる左室容量曲線の分析—虚血性心疾患について—

鹿児島大学医学部第2内科
高岡 茂、片岡 一、大窪利隆
大重太真男、中村一彦、橋本修治

虚血性心臓病に対し安静及び運動負荷心プールスキヤンを施行し、左室容量曲線よりpeak sys $\frac{dv}{dt}$ 、peak dia $\frac{dv}{dt}$ 及びpeak $\frac{dv}{dt}$ のdia/sys ratioを求め、安静時と負荷時を比較し検討を行った。

対象は正常対照群10例、冠動脈造影にて有意の器質的病変を有し、安静時左室駆出率50%以上の比較的心機能の良好な虚血性心臓病群16例である。虚血性心臓病群は運動負荷で左室駆出率の増加するA群（8例）と不変もしくは低下のB群（8例）に分けた。安静時と運動負荷時でpeak sys $\frac{dv}{dt}$ 、peak dia $\frac{dv}{dt}$ をそれぞれ拡張終期カウントで補正した値と、peak $\frac{dv}{dt}$ のdia/sys ratioについて検討した。正常群は全例sys $\frac{dv}{dt}$ 及びdia $\frac{dv}{dt}$ は増加し、dia/sys ratioも増加を示した。虚血性心臓病では、dia $\frac{dv}{dt}$ は両群ともに低下した。sys $\frac{dv}{dt}$ はB群では全例低下したがA群では低下例も増加例もあつた。dia/sys ratioはB群では全例低下したがA群では一定の傾向を示さなかつた。